ある女子大学生の自我同一性確立の過程に関する事例研究

外山嘉奈子*・平出彦仁**

A study of the case of a female universify student who had struggled to achieve ego-identity

Kanako TOYAMA & Hikohito HIRAIDE

Abstract

This study reports the case of a female university student who had experienced identity crisis and had sturuggled to achieve ego-identity. At the first stage of her counseling process, she had a negative attitude toward her personal past, present and future. At the second stage, she had looked back over her own history and accepted a negative side of her personality. At the third stage, she had the most positive image of herself and had built a new ego-identity gradually.

Japanese culture has the characteristic that people have cared for each other and sometimes have manipulated themselves to keep a sence of the unconscious unity. It was the characteristic of her ego-identity to be built on a sence of the unconscious unity with the other people.

I　はじめに

1　青年期の発達課題

Erikson(1950,1959) は，青年期を「子供時代の最後の終結段階」と位置付けている。青年期の中心的な発達課題である自我同一性の確立とは，それ以前の発達段階において形成されたすべての同一化や自己像を取捨選択し，再構成することによって成る。彼のとらえる自我同一性とは，自己の斉一性，時間的連続性及び一貫性，所属性を以て定義される自己意識の総体であり，換言すれば，過去，現在，未来のいかなる時のいかなる状況においても，自己肯定感と自己信頼感を持ち，また，所属集団に対する自己の存在感や有能感をも感じられる自我の状態と言えよう。

＊横浜国立大学非常勤講師 (Part-time Lecturer of Yokohama National University)
＊＊心理学教室 (Dept. of Psychology)

Erikson によれば，高度な成長潜在力を秘めながら葛藤が増大するという「正常な発達の危機」である同一性危機を乗り越え，自己が総体的に意味付けられるに従って，自我同一性は徐々に確立される。その過程では，本当の自分がわからないといった不確実感で象徴される同一性拡散の状態も生ずるが，「青年期の『症状』や挿話と，神経症および精神病の症状や挿話との類似性にもかかわらず，青年期は病気ではない」のである。

2　日本における青年期の対人恐怖的心性

さて，筆者は大学の学生相談室においてカウンセリングを担当してきたが，前述した青年期の性質上，同一性拡散の状態に陥り来談する学生が多く見られた。同一性とは日本語では「自分」という言葉で表現されるであろうが，彼等はその大切な自分が混乱し，何だかわからなくなってしまったり，果ては自分がないというような喪失感を体験し，自分とは何かという問いかけを繰り返していた。

学生達の話を聴いていると，神経症レベルの者のみならず健常者であっても，自分はどう生きてきたか，これからどう生きてゆくのか，という自己を主体とした問いかけと半ばセットのようにして，自分は人からどう評価されてきたか，どう生きてゆくのが人から望ましいとされるか，という問いかけを行なっているようであった。即ち，他者との関係性の中で，また，自己に対する他者の評価を検討することを通して，自らの同一性を探ってゆこうとする態度が色濃く見られたのである。

そうした姿勢が昂じて，他者に知覚されている自分についての悩みが深刻になると，他者といることに苦痛を感じたり，視線を合わせられない，話が出来ないといった訴えが出され，一過性か病的かは別として，対人恐怖的心性の現われと考えることが出来た。

対人恐怖とは，対人場面において過剰な不安や緊張を生じ，人から嫌がられたり変に思われたりするのを恐れて対人関係を避けようとする神経症であり，森田正馬により提起された。森田(1953)は「自ら，人前で恥ずかしがることを苦悩する」という症者の特徴に注目し，「赤面恐怖」「視線恐怖」「表情恐怖」等，対人場面における「羞恥」から生ずる症状を総称して「対人恐怖」と呼んでいる。

日本人一般が対人恐怖的心性が強いこと，つまり人見知り，過度の気遣い，対人緊張等の周囲を気にする対人態度や意識を持っていることは，多くの精神医学者や心理臨床家によって明らかにされており，日本の文化的，社会的特質との関連をも論じられている。

近藤(1964，1970)は，日本家屋では，堅固な仕切りのない中で各家族成員が生活してゆくため，お互いに配慮し合う心遣いが要請とされることを指摘し，そうした日本的特性を「配慮的要請」と名付けた。さらに，近代化に伴い西洋から移入された考えとしての，個人の自己主張に対する要請を「自己主張的要請」と命名し，日本社会では両者の葛藤が生じやすいと考えた。近藤は，「人から嫌われないように，好かれたい」という「配慮的要請」と「劣等のものと思われず，偉いものと思われたい」という「自己主張的要請」との間には葛藤が生じ易いと述べ，それが対人関係における不安定さを生み，対人恐怖の原因となるとした。

土居(1971)は，自他の一体感を求める「甘え」の心理の観点から対人恐怖の原因を分析し，対人恐怖は「個人がこれまで馴れ親しんだ共同体から別れて，新しい見知らぬ社会で

生活せねばならなくなった時に起きることが多い」と述べ，甘えたくても甘えられないという「甘え」の不満を募らせることが，発症につながるとした。

また，木村(1972)は，日本人は自己の存立の根拠を自己の内部には持っておらず，自己の外部，つまり人と人との間に持ち，自己を相手の側に委ねていると指摘し，こうした自己のあり方は対人恐怖者に際立った形で認められ，自己の評価は他者の評価に依存しており，しかもそれは否定的な評価の対象でしかないと考えた。

ところで，対人恐怖的心性は青年期において強まることが指摘されている。阿部・増井(1981)の小学3年生から大学生までを対象に行なった調査では，15才から18才にかけて，健常者の30%以上の者が対人恐怖的傾向を持っていると報告された。

また，永井(1994)が健常者を対象に施行した調査では，対人恐怖的心性の自覚が高まるのは，自己を強く意識し始める中学生から高校生にかけてであり，その間に大きな差があると明らかにされた。彼は対人恐怖的心性を「内省的自己意識」「関係的自己意識」「対人状況における態度・行動」の3つの次元から分析しているが，中学生から高校生においてはどの次元についても有意な差が見られた。大学生は高校生と比較して対人状況における態度・行動はさらに強く意識されるものの，関係的自己意識は同程度で，内省的自己意識は低くなっており，行動レベルの問題を自覚しているが，それに対して内的葛藤を持つことなく，自己のあり方を受容していると指摘されている。

さらに増野(1981)は，青年期と対人恐怖との関連について考察し，この時期には同一性獲得のため，自らのなるべき姿を他者に求めて他者を意識すると同時に，他者から自分がどう見られているかを通して自己を知ろうとするため，二重の意味で他者が意識され，そこで与えられた自己の評価が対人恐怖としての問題意識に結び付くとした。

日本における青年期とは，同一性危機に直面する中で多くの者が他者を強く意識し，時に対人恐怖的な心性をも持ちながら，集団における自らの位置付けを振り返り，適当な自己イメージを形成してゆく時期と考えられよう。今回報告するのは，「自分には何もないのではないか」という不安を抱き，自己否定的な感情にとらわれながらも自らの同一性を確立しようと模索していった大学生女子の事例であり，その面接経過をまとめることとする。

II　ケース概要

(クライエント) A子 (女子)，来談当初大学2年生 (20才)。

(主訴，及び来談経路)

「自分には何もないのではないか」という不安感と「何とかしなければならない」という焦燥感とに苦しんで，大学の学生相談室に来室し，筆者がカウンセリングを担当した。

(家族，及び生育歴)

国家公務員の父親，専業主婦の母親，弟（2才違い）の4人家族で，家庭環境は恵まれている。転勤族の父親に伴われて幼い頃から引っ越しを繰り返して育ち，小学校，中学校を通して3回転校する。中学2年生になって初めて一ヶ所に定住した。

Ⅲ 面接経過

X年2月からX＋1年4月まで計24回の面接が行なわれたが，面接経過は大きく3期に分かれた。A子の自己イメージの変遷に焦点を当てて各期毎に説明する。

第1期ー第1回〜第8回

第1期では，A子は「自分には何もないのではないか」という不安に突き動かされ，行動面での急激な変化を模索した。

初回面接（2月）では，A子は来室すると礼儀正しく挨拶し，相談のある旨を筆者に告げた。言葉遣いは丁寧で，A子の母親の世代の好みそうな洋服をきちんと着ており，筆者は良いお家のお嬢さんという印象を持った。

A子は弟が大学受験で志望校に合格したのをきっかけに，自分がどこかイライラしていると感じるようになり，「自分には何もないのではないか」という不安に苦しめられるようになったと話し始めた。一度そう考えると不安定な心理状態が何日か続き，家族に当たり散らしてしまうと述べ，自己を持て余している様子であった。それまで家と学校とを往復するだけの大学生活を過ごしてきたA子は，勉強にもクラブ活動にも打ち込んだことがなく，「ただ流されているだけで，付和雷同して自分がない感じだ」と，自らの状態を表現した。考えがまとまらない様子で時に黙り込んでしまうA子に，筆者は継続面接の必要性を感じ，そう提案するとA子も同意した。A子の直面している課題は自我同一性の確立であると，筆者には感じられた。

第2回ではA子は随分と落ち着きを取り戻していた。初回面接の後，両親とも何度か話し合ったそうで，筆者にはしっかりとした家庭のイメージが浮かび上がった。この回のA子にはイライラの原因を明確にしようという姿勢が見られ，話し合ううちに，「何かやりたいんだけれど，出来ない自分」に苛立ちを感じていることがわかった。A子によれば，大学での彼女は「いてもいなくても同じような存在」であり，「そういう自分が嫌だし，クラスの中心的な存在にはなれなくても，友達に囲まれて冗談を言い合えるような明るい感じになりたい」と述べ，自らの理想とする現代的で快活な性格特性と，本来の持ち味である控えめで古風な性質との間のギャップをつらく感じている様子であった。

第3回（4月）では長い髪を切り，髪型を活発な印象を与えるショートカットに変えて来室し，春休みには初めてアルバイトに挑戦したと語った。第4回では，夏休みに1ヵ月間の海外旅行をする申し込みを旅行社で行なったと報告した。「変わりたい気持ちが強くて，一大決心した」との発言から，主な動機は海外旅行に対する興味，関心ではなく，自己変化への希求であることがわかった。長期間親元から離れた経験のないA子にとって，それは清水の舞台から飛び降りるような決断であろうと筆者には感じられ，無理をしているのではないかという疑問も脳裏をよぎった。

5月に入って，第5回，第6回と海外旅行の不安に関する様々な訴えが続き，A子は変わりたいという理由だけで参加するのは動機が不純ではないかと考え込んでいた。第7回（6月）では，アルバイトをしたり海外旅行を決めたりして表面的な行動は変わっているのに，気持ちが付いてゆけないと述べ，「自分がぱっと変われるんじゃないかと思って旅

行に申し込んだのに，全然変われない」と落胆の色を滲ませた。さらに，「期待が大きかったり理想が高かったりするのに，頑張れないのかなあ」と自分の腑甲斐なさを噛みしめている様子であった。「昨日の私と今日の私は別人ですっていうような急激な変化を期待しても，それは無理だと思うし，階段を10段位駆け昇ったつもりでも，無理をすれば上から転がり落ちるってこともあるわよ。1段1段確実に昇って行くことも大事ではないかしら」と筆者がコメントすると，A子は少しほっとして，「そう言ってもらえると，安心するけれど」と述べた。第8回では，旅行説明会で参加者の雰囲気に馴染めなかったとの報告があり，仲間とうまくやれるであろうかとの不安から，一気に旅行に参加する自信がなくなったと語った。

第2期ー第9回〜第17回

第1期では外的な変化を模索したA子も，第2期に入ると自らの内面に関心が向かい始め，それまで否定したり，拒否したりしていた自分の性格特性を受け入れようとする心の動きが見られた。

第9回では旅行をキャンセルしたとの報告があり，久しぶりに晴れ晴れとした表情を見せた。A子は「自分は見栄張りで，良い自分，格好の良いところを見せたいと思うし，行くのを止めたって言ったら，クラスの友達がどう思うかと心配だけれど，駄目なものは駄目なんだと思うし，駄目な自分でも良いと思う」と話した。少しずつ「駄目な自分」をも受け入れられるようになっているA子の様子を，筆者は嬉しい思いで受け止めた。

第10回（7月）では友人に旅行をキャンセルした話が出来，自分でも驚きを隠しきれないと報告し，「駄目なところも見せて良いんじゃないかと思う」と話す。旅行には行かれなかったが，何か自分に合った目標を探したいとのことであった。

第11回（9月）から第15回（12月）にかけては，過去の自分について振り返り，整理するという内的作業が行なわれた。丹念に振り返るうちに，小学生で転校した時には慣れるのに時間がかかっても気の合う友人が出来たし，楽しい思い出も多くあったとA子は気付いた。心に傷を受けたのは中学生での転校であり，親友と別れる悲しさや，新しい学校でクラスメイトに受け入れてもらえるかと不安に思い，拒否されるのを恐れて「本当の自分」を出せず，ずっと相手に合わせてきたというつらさを吐露した。人間関係に敏感になり，親しい友人との交流が重要になる思春期に入ってからの転校が，A子にとっていかに負担であったかが感じられ，筆者は彼女の疎外感や孤独感を丸ごと抱えたい気持ちで聴いた。高校生になると，A子は「自分とは何だろう」と考え始め，受け身的な対人関係しか持てない自分のあり方に疑問を持ったが，中学生で転校して以来の対人不安の強さから高校時代を通じて自分から友人を求めることが出来ず，「ただひたすら友人から話しかけられるのを待っていた」と語った。さらに，「母に話してしまえばそれで済んでしまったので，自分自身もそれ程友達を必要としなかったのかもしれない」と付け加えた。

第16回では，話し合いの焦点は大学に入ってからの対人関係の問題に絞られた。入学後，このままではいけないという思いから，A子には自ら進んで話さねばならないという義務感が生じたが，やはり対人緊張の強さを苦にしてきたとのことであった。友人と話す場面で，「相手は本当は自分と話したくないのではないか」「こんなことを言うと，変に思

われないかしら」と心配になると焦ってしまい，頭の中が真っ白になり余計に話せなくなったと，A子は苦痛な状況を回想して説明し，その根底にあるものは，相手が自分を受け入れてくれるかどうかという不安であると，自らを分析した。そのため，自分を受容してくれると予想出来る年上の人とは話し易いが，同年代の者との会話が苦手であり，それも2人ならば良いが，3人になると会話に入れない自分を強く感じたと付け加えた。筆者は青年期的な要因と生育歴的な要因の両面から，A子が対人恐怖的な心性を強く示していると感じた。

第17回（1月）では，これまで人には自分の良い面だけを見せたいと思ってきたし，自分でも嫌なところは見たくなかったが，最近では自分でも嫌なところを認められるようになりつつあるので，「友達にも本当の自分をわかって欲しいし，自分のことを話してみたいと思う」と語った。以前よりも自己肯定的になるにつれ，A子の中では大学で行動を共にしている友人とももっとわかり合いたいという思いが沸き上がってきていた。そう考えるようになってから，以前程苦慮せず友人とも話せるようになった気がするとA子は語ったが，「自分」をどの程度，またどのように表現して良いのかわからず，模索を繰り返している様子であった。さらに，「自分は良い意味でも悪い意味でも，平均から出るのが嫌なんだと思う」と，他に配慮して常に人並みでありたい自分の姿に気が付いた。

第3期ー第18回〜第24回

第3期ではA子はそれまでの自己イメージがネガティブなものばかりであったと気付き，良いところを見付けたいという思いに変化していった。そうした良い兆しの中でA子は4年生になり，大学にあまり来なくなることと就職活動が忙しくなることから，ケースは終結となった。

第18回では，「この頃では嫌なところも自分の一部だって少しは認められるようになってきたと思うけれど，そればかりが見えてしまって，良いところってないような気がする」と語った。

第19回から第21回にかけて就職に関する話題が多くなり，本当に就職できるのだろうかという不安を抱えながらも，就職活動を徐々に開始している様子が窺われた。第20回（3月）では，自らの希望就職先について，「建前としては小さくてもやり甲斐のある仕事の出来る会社に入りたいと思うけれど，実のところ方針は決まっていないし，本音としては入社してからの人間関係がうまくいくところなら，どこでも良いような気がする」と語り，未知の環境に入ってゆく時に不安が強くなると付け加えた。この頃になるとA子は，「自分は」「私は」という主語をはっきりと言うようになり，ありのままの自分を見据え，それを受容する姿勢が少しずつ出来ているように筆者には感じられた。常にポジティブで安定した自己イメージを持つまでには至らないが，面接を開始した当初にはぼやけていた自己イメージがはっきりとし，形を成してきた印象があった。この回では，以前から関心のあった民間のボランティアのサークルに入会したとの報告もあり，会への参加の意欲が感じられた。4月最初の面接である第21回では，4月一杯で面接を終了するという話が決まった。

第22回では，「カウンセリングを始めた頃にはただイライラするだけで，原因が何かも

わからなかったけれども，今は少し自分のことがわかってきて，悪い面も認められるようになってきた気がするし，良いところも少しはあるのかなと思うようになった」と，面接経過を自ら総括した。

第23回では，終結を前に自分の長所，短所を整理しておきたいというA子の希望で，特に長所について話し合った。「人の話をじっくりと聞けることが長所と言えば言えると思うけれど，それも自分が話の出来ない言い訳かもしれない」と，長所をあげながらも自信のない様子であった。

第24回では「将来的には良い家庭を築くことが自分に一番合っているような気がするけれども，今は就職を何とかしなくちゃいけないと思う」と，短期的な目標と長期的な目標とをまとめ，「まだ自信はないけれど，物事に誠意を持って対応出来ることや人の話を良く聞けることが自分の長所かもしれない」と語った。さらに，「いつかは人を暖かく受け止められるようになりたい」と遠い将来への展望を語り，「そんな風になれない，駄目だって言っちゃえば楽だけれど，理想に向かって努力したいっていうのはあったりして」と笑った。「自分も結構捨てたものじゃないのかもしれない」と少しおどけて見せて退室したA子の後ろ姿を見送りながら，筆者は彼女の行く末に幸あれと願った。

Ⅳ　考察

A子の面接経過に見られる自我同一性確立の過程と，その日本的な特徴について考察する。

1　面接経過に見られるA子の自我同一性確立の過程

Eriksonの抽象的で多義的な同一性概念をより具体的にとらえようとしたMarcia (1966) は，「同一性地位」という考え方を提唱し，半ば構造化された「同一性地位面接」を行ない，同一性危機の体験の有無，及び「職業とイデオロギーの領域における」積極的関与の程度の2つの基準から，「同一性達成地位」「モラトリアム地位」「早期完了地位」「同一性拡散地位」の4つの類型を導き出した。同一性達成地位とは過去に危機を体験し，葛藤の中で自らの可能性を模索した結果，自分なりの解決を見出してそれに基づいて行動している状態であり，モラトリアム地位とは現在危機を体験している最中にあり，自分が傾倒するべき対象を見出そうと努力している状態である。また，早期完了地位とは自分の生き方について惑うことなく，両親や権威の目標や期待をそのまま受け入れた状態であり，同一性拡散地位は危機を体験したか否かにかかわらず，自己の傾倒する対象を全く持たず自分の生き方がわからない状態である。

都筑(1993)は同一性地位と時間的な展望のあり方との関連に着目し，大学生男女を対象に質問紙調査を行ない，同一性地位の類型による過去，現在，未来の自己イメージの持ち方の違いを検討した。その結果，同一性達成地位群は自分の過去，現在，未来を最も統合した形でとらえ，未来志向的であり，反対に同一性拡散地位群は過去，現在，未来をそれぞれバラバラでネガティブなものとしてとらえ，過去を最も重要と考えていた。モラトリアム地位群は未来志向的ではあるが，同一性達成地位群と比して過去，現在，未来の時間的な統合度は低いと報告されている。

A子には同一性地位面接や質問紙検査を行なった訳ではないが，これらの考え方は彼女の面接経過を振り返る上でも多くの示唆に富む。第1期のA子は過去，現在，未来にわたって自己イメージを否定的にとらえ，自分がわからないという混乱の中にあった。同一性拡散の状態にあったと推測出来よう。A子によれば「自分とは何か」という問いかけは，高校生の頃からあったというが，そうした問いに正面から取り組まず，母親との強い絆に守られて何となく過ごしてしまったようである。大学入試に成功した弟との比較により，彼女は過去に自己の可能性を追求してこなかった事実を突き付けられた形となり，「自分には何もないのではないか」という不安感に苛まれたと言えよう。A子は「自分がない感じ」で，集団の中でも「いてもいなくても同じような存在」であることへの焦燥感から，自己を変革するべく性急な行動変容を志向したが，それは焦りを内的に処理出来ないが故の，一種のアクティングアウトとも受け取れた。

ところで，A子が目指す人間像とはどのようなものかというと，この時点では理想を掲げるばかりで現実的ではない。ただ今の自分は駄目であるというA子自身の強い思い込みがあり，充実した大学生活を送らねばならないという強迫的な心理が働いていたと言えよう。

第2期では，A子は自己の内面に目を向けるようになり，それまで見ないようにしてきた自分のネガティブな側面を見よう，さらには認めよう，受容しようという心理的変化が生じ始めていた。海外旅行のキャンセルを機に，他人に「格好の良いところを見せたい」と思う自分を見つめ直し，「駄目なところを見せても良いんじゃないか」というように，徐々にではあるが自己受容的になっていった。

また，面接を通して過去を振り返り整理するうちに，A子は対人場面における自身のあり方をも検討するようになった。彼女には他者に好かれたいと思うためにかえって「本当の自分」が出せない，あるいは自分の欠点ばかりに目が行くからこそ目を逸らし，他人にも悟られまいとするといった，対人恐怖に特徴的な心理が働いており，そうした心の動きに気付き，じっくりと見据えることは，彼女にとって大変な試練であった。だが，過去，現在のありのままの自分の姿と向かい合わずには，自己を肯定的にとらえ直し，同一性確立のために再構成することは出来なかったであろう。

さらに，最も危険な同一性拡散の状態を脱し，ネガティブな性格側面をも徐々に受容して未来志向的になりつつあったA子が，第2期の後半に入って，新しい「自分」を友人にもわかって欲しいと思い始めたことは興味深い。Erikson の考えに従うならば，自己の斉一性と一貫性とをある程度兼ね備えた「自分」というものを，A子は獲得しつつある状態にあったと言えようが，さらに進んで，新しい資質が他者にも承認される性質のものか否かを検討し，帰属性をも持った自己像の確立を目指していたと考えられよう。少しずつ自己信頼感が芽生えつつあったからこそ，他者にも「自分」をわかって欲しいと思うようになり，またわかってもらえるのではないかという無意識的な期待もあったように見受けられる。

第3期では，それまで自分の嫌な面ばかりに目が行っていたが，良いところを探してみたいといった，より前向きで未来志向的な考えへとA子は傾いていった。回を重ねる度に

「嫌な自分を少しは認められるようになった」けれども，「良いところはないような気がする」という自信のない様子から，「人の話をじっくりと聞けることが長所と言えば言える」というように，多少なりとも自分の長所を示せるようにA子は変化した。

面接の終結時には，長期的，短期的な自己目標を定め，「いつかは人を暖かく受け止められるようになりたい」と未来の自己に対する期待も寄せており，過去，現在，未来にわたってすべてを肯定出来るまでには至っていないが，自分を信頼しよう，あるいは信頼したいからこそ頑張ろうといった思いが育ってきていた。以前から関心があったというサークルへ入会したのもそうした意欲からであろうし，彼女の今後のテーマとは，何らかの集団に所属し，そこに一体感を持ち，他者からも是認されているといった帰属性の感覚を培ってゆくことであると考えられた。まだモラトリアムの状態にあると推測されるが，以前よりも具体的かつ積極的に何かを見出そうとしているA子の姿勢には，さらに安定した同一性達成へとつながる萌芽のようなものが感じられた。

2　A子の自我同一性のあり方の日本的な特徴

河合(1983，1994) は，日本人は自我を欧米人のように他と屹立し得る形では形成せず，他に対する配慮を基盤として他とつながっており，自我の形成過程においても「自分を他の存在のなかに隠し，他を受け入れつつ，なおかつ自分をなくしてしまわないという複雑な過程」を経なければならないと考えた。さらに，日本人のそうした自我構造は対人関係にも如実に反映され，人間関係の基本構造は，自他の無意識的な一体感を土台として成り立っていると述べている。

面接当初は「自分がない」という感覚に苦しんでいたA子が，終結近くになると「自分は～」「私は～」と，主語をはっきりと用いるようになり，これは彼女がある程度同一性を確立したサインと見ることが出来たが，彼女も欧米型の確固とした自己を獲得したのではなく，他との一体感を基盤として成立する日本的な自己を確立していった。「良い意味でも悪い意味でも，平均から出るのが嫌なんだ」という発言に代表されるように，A子は集団からはみ出さず人並みであることに一種の安心感を持っており，彼女のとらえる「人並み」とは，他者との一体感を保てる状態と同意味であると考えられた。しかし，同時に彼女は自己が集団に一体化して没個性的になることは拒否している。「付和雷同して自分がない感じ」になるのではなく，人並みでありながらも「自分」を見失わないようになりたいと考えており，それこそが彼女の志向した同一性のあり方であったと言えよう。

こうした日本的同一性の獲得の過程では，他者との関係性が重要となると本論の最初にも述べたが，A子の面接経過を他者との関係を軸に再度振り返ってみよう。同一性危機に直面したA子は，まず集団との関係を念頭に置き，地味で流行遅れの学生という自身の劣等感を克服し，一般的な大学生として自他共に認め得る存在となろうとした。増野が指摘するように，A子も自己のなるべき姿を他者に求めて他者を意識し，対人不安も強くなったと言えよう。彼女は行動パターンの変革を試みた結果，他を模倣をしようとしても出来ない，他者とは違う自分というものに突き当たって，ようやく真の意味での自我同一性獲得という課題に直面したようである。もしA子が行動変容を試みた段階で何らかの成果を得てしまったならば，彼女は他者との無意識的な一体感に安堵して，内的問題に取り組ま

ずに過ごしてしまったとも考えられる。

さらに，生育歴を振り返って自己を再考する過程においても，A子は常に他者から見た「自分」というものを考慮に入れ，自分が自分をどう考えるかという視点と，他者が自分をどう見るかという視点の両方を取り入れ，2つの視点のバランスを取りながら，適当な自己像を形成しようとしていた。他者の評価というフィルターを通して自己のあり方を検討するという，日本の青年期特有の心理的メカニズムにより，自己を再構成していったと言えよう。

さて，面接終結時にA子が理想として打ち出した自己像とは，他者と親和的に接することの出来る暖かい人柄の持ち主ということであり，そうなるべく努力したいという意欲も感じられた。日本人にとって好ましい対人関係が，他との一体感を前提とした察しの良い関係であることは，土居(1971)によっても河合(1994)によっても指摘されているが，A子もまた日本的な良い人間関係を保持する能力を備えた自己像の形成を何にも増して望んでいた。同一性を確立してゆく過程において，A子は他者に友好的，あるいは援助的に振る舞える資質を持とうとすることで，新しい「自分」，即ち人並みでありながらも無個性にならない可能性を見出そうとしたと言えよう。

ところで，A子が集団との一体感を求めて他者を強く意識し，対人恐怖的な悩みを抱えた背景には生育歴的影響も見られ，その背景にも日本の文化的特性が関連していたと言えよう。

木村(1972)は，欧米人と比して日本人が「われわれ日本人」という表現を多用することに注目し，そこに表わされた「日本人の集合的アイデンティティが，西洋人のそれと比較して個人的レベルのものではなく，超個人的な血縁的，それも血縁史的な」性質を持つものであると指摘している。日本においては国家という単位のみならず，もっと小さな集合の単位でも，集団内での一体感を重視し，その成員以外には排他的な傾向を示す「われわれ」アイデンティティが存在すると考えられよう。

転勤族の父親に伴われて引っ越しを繰り返したA子も，日本各地の御当地アイデンティティや学校アイデンティティ，果てはクラスアイデンティティのようなものにも遭遇し，疎外感や違和感を味わったに違いない。察しの良い関係を求めれば求める程，A子は集団からはみ出してしまうことに苦痛を感じたであろう。自己主張すれば孤立するのではないか，相手を不快にしては集団に入れてもらえないのではないかとの危惧感から，おそらく彼女にとって新しい環境に適応することとは，主体的に集団に入ってゆくことではなく，受け身的に集団の中に入れてもらうこととなってゆき，他と一体化するために自分を否定的にとらえるようになったのではあるまいか。

本論の最初に述べた近藤の考えにそって述べるならば，A子は配慮的要請を重視し，自己主張的要請を抑え付けることにより，集団との調和を図ろうとしたと言えよう。青年期に入ると，自己に対する関心の高さから自己主張的要請が強くなると筆者は考えるが，他者に拒否されることへの恐れを持ち，自己否定的な傾向のあったA子は，この時期に至って，自分らしさをアピールしたいが，それを相手が受け入れてくれるかどうか心配でならないというジレンマに陥り，対人場面での不安も高まったと推測出来る。

A子の場合，青年期的要因からも生育歴的要因からも他者を強く意識し，対人場面における悩みも大きくなったが，そうした対人恐怖的な自覚について考えてゆくことがまた同一性獲得へとつながっていったと言えよう。

3　まとめ

Erikson(1959) によれば，自我同一性の獲得は青年期において最も重要な課題とされるが，それで終わりということではなく一生続く問題である。A子も以前よりは妥当な自己像を見出したという成果を以て，内的作業に一区切りを付けたが，社会的役割や身体，心理面での変化に遭遇する度に，再び自己のとらえ直しが行なわれるであろうし，さらに新しい資質を備えた自我同一性へと変化してゆく可能性もあるであろう。また，他との無意識的な一体感を土台とした日本人的な同一性の性質上，A子もようやく確立しつつあったはずの「自分」というものが，他者との関係如何によってグラグラと揺らぎ，存外に脆いものであることを度々体験するであろう。

A子との面接を通して筆者は，他者との無意識的な一体感を失わず，かつ自己の存在価値をも見出してゆかねばならないという，日本的な同一性の獲得の過程がいかに大変であるかを痛感させられた。筆者自らの課題として今後も事例研究を重ね，この点について考えてゆきたい。

引用文献

阿部和彦・増井武士　1981　恐怖及び不安症状の年齢による増減と性差について－青少年の調査より－　精神医学 23，495－504.

Erikson, E.H. 1950　Childhood and society. New York : W.N. Norton & Company. Second edition, 1963.（仁科弥生訳　1977，1980　幼児期と社会1，2　みすず書房）

Erikson, E.H. 1959　Identity and the life cycle. New York : International Universities Press.（小此木啓吾訳　1973　自我同一性　誠信書房）

河合隼雄　1983　大人になることのむずかしさ　岩波書店

河合隼雄　1994　河合隼雄著作集 10　日本社会とジェンダー　岩波書店

木村　敏　1972　人と人の間　弘文堂

近藤章久　1964　日本文化の配慮的性格と神経質　精神医学 6，97－106.

近藤章久　1970　対人恐怖について－森田療法を起点として－　精神医学 12，382－388.

土居健郎　1971　甘えの構造　弘文堂

都筑　学　1993　大学生における自我同一性と時間的展望　教育心理学研究 41，40－48.

Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. Journal of Personality and Social Psychology, 3(5), 551-558.

増野　肇　1981　対人恐怖症の出現しやすい状況　飯田真・岩井寛・吉松和哉編　対人恐怖　有斐閣選書　103－114.

森田正馬　1953　赤面恐怖の治し方　白揚社

永井　撤　1994　対人恐怖の心理　サイエンス社